

音楽の泉

くメディアとともに

この世に生を受けて以来七
年間、私は電気文明の外に生
きていた。ラジオも無く、動
物や風などの自然音のほかに
音楽との最初の出会いは母の
歌だった。今でも庭先で歌う
もんぺ姿や歌声はつきりと思
い浮かべることが出来る。そ
れがブラームスやシューベル
ト、メンデルスゾーンなどの
名曲だったと知ったのはずっ
と後だった。

小学校に入ったころ、学校の
用務員さんから手作りのラジ
オを頂いた。これはAMラジ
オでは高級回路のいいものだ
った。これでようやく我が家
ではラジオが聴けるようにな
り、聴きたい番組の時間にな
るとラジオの前に座った。専
ら歌謡曲やラジオ・ドラマを
聴いていた。そのころ、近所
ではテレビを買う家庭が開始
めていた。

小学生時代は近所の映画館
にもよく通った。三本立て三

十円、選択の余地のない中で
出会った総天然色映画、題名
は忘れたが、ウィーン少年合
唱団と共演した山本富士子や
りんごの花の艶やかさ、この
道」のコーラスやヴァイオリ
ンの音色の美しさは鮮烈だっ
た。これが音楽映画等のAV
体験の原点となった。

中学生になるといつの間
にラジオでいろんなジャンルの
音楽を聴くようになってい
た。アルゼンチンタンゴなど
ラテン音楽の魅力にとりつか
れたのはこの頃だったろう。

若き美空ひばりの歌う「ウ
んご追分」オリジナル旧録
音」の素晴らしさにも息を飲
んだ。曲も歌も今だに私の中
ではトップテン入りだ。

高校に入った昭和三九年四
月、当時最新鋭のFM付きト
ランジスタラジオを買っても
らった。NHKの実験放送が
始まっていたからだ。しかし
県内ではまだNHK仙台のFM
電波が届かないところが多
かった。私は一本松 小浜城

址)に針金を張っておき、ア
ンテナにしてよく聴きに行っ
たものだ。しかしその年の七
月には福島放送局から電波が
送信されるようになり、鮮明
な高音質で音楽が聴けるよう
になったのがとても嬉しかっ
たのを覚えている。

BBCのクラシック音楽専
門ラジオ局をモデルにしたも
のだったので、内容は今とは
比較にならない充実ぶりだっ
た。民族音楽や民謡、海外の
伝統音楽以外はクラシックの
名曲名演のレコードを使って
実験放送を流していた。うる
さいトークも無く、専門的な
短い解説によるレコードの放
送が多かったのでとても有難
かった。レコードは買える時
代ではなかった。詳細な番組
表を毎月NHKから送っても
らい、むさぼるように聴いた。
たくさん名曲や名演奏に出
会うことができた。

また、東京オリピックの開
会式の日英語の勉強に必
要だという名目でテープレコ

ーダー オープンリール)を
買ってもらった。気に入った
曲や何度も聴きたい曲は録音
して繰り返し聴くのに大いに
活用した。

このころマーラーの長大な
シンフォニーはひたすら我慢
して聴いたおぼえがある。あ
の耽美的で濃厚な音楽も当時
は無機的な響きにしか聴こえ
なかった。しかし、その後も
分かりにくい曲でも繰り返し
聴くことによりだんだん楽し
めるようになっていった。

ラジオ片手に庭先の陽だま
りで聴いたドビュッシーの
「牧神の午後への前奏曲」は
脳髓が痺れて金縛り、あれ以
来この曲は聴かない。聴いて
も今は何の感興も湧かないの
だ。もう感受性が鈍ってしま
ったのと、後にワグナーの毒
にあたってしまったせいかも知
れない。

また、トスカニーニアワー
で聴いた数々の峻厳な名演は、
忘れられない。ヴェルディな
どのオペラやメンデルスゾー

ン、ベートーベンやブラームス、ワグナーは絶対だと思っただ。後にレコードでトスカニニ全集を買うことになる。

ヘレン・メリルがクリフォード・ブラウンのトランペットをバックに歌うあの有名な曲との出会いも衝撃的だった。ジャズに開眼した瞬間だった。後にクリフォード・ブラウンのレコードはほぼ全部集めた。今でも新発見のライブ盤やこの時代のジャズ音楽（二九五〇年代のハードバップ）を求め続けている。

高校三年のときカラヤンがBPOを率いて来日した。ピートルズも来日、テレビ中継やラジオに釘付けで受験勉強は進まなかった。それでなくても深夜放送全盛時代だった。このころからオーディオにも関心を持ち始め、資料を集めてオーディオルームの構想を練っていた。

NHKFMの本放送が始まったのは大学入学後の昭和四四年だった。ステレオセット

で聴くようになっていたが、このころからあまりラジオは聴かなくなった。番組が万人向けに変わっていき、つまらなくなってきたからだ。そういう中でも、昭和四五年FM放送で流れたオットマール・スウイトナーが指揮するモーツァルトのオペラの響きは理想的なものに聴こえた。モーツァルトに不可欠なニュアンス豊かな軽やかでこぼれるような愉悦感が印象に残っている。結婚して間もないころ、彼の指揮するベルリン国立歌劇場管弦楽団（東ベルリン）の公演を郡山の市民会館に二人で聴きに行った。モーツァルトのシンフォニーが素晴らしかった。だいぶ後になってからレコードセットを買って聴いた。

学生時代は、ステレオ実況録音のコンサート番組が放送されるようになったのでよく聴いた。コンサートはレコード以上に夢の世界だったからだ。海外のオペラやコンサー

トの放送では印象に残る演奏がいくつもあった。年末恒例のバイロイト音楽祭の放送もその一つだ。長時間の忍耐の彼方に輝かしい愛の陶酔が聴こえてから、ワグナーが大好きになった。

ワグネリアンにはルードヴィヒ二世やヒトラーをはじめ、哲学者や石原慎太郎、小泉純一郎など特異な政治家や文化人が多いし、ある意味不健康な音楽なので公言ははばかるが、大好きだ。現実にはありえない不健康な世界で具現化された愛や夢の世界のたとえようもない感動と陶酔からはもう抜け出せない。品行方正とは別格の世界がある。

このころ少しずつレコードを買うようになった。アルバイト代は全部レコード代に消えた。大卒の初任給が三万前後の時代に一枚二千元は高かった。今なら一万円以上に値する。

おりしもベートーベン生誕二百年記念の年に合わせてヨ

ロッパでは盛んに素晴らしい企画のレコードがたくさんリリースされた。ラジオでもたくさん放送されたので、ベートーベンの音楽に心酔していくきっかけになった。

このころ夢中になったのはフルトヴェングラーだ。特にベートーベンの三番、五番、九番やブラームスの三番、四番、ブルックナーの八番などの実演は絶品で、他の演奏はもう聴けなくなった。貧しい音質にもかかわらず、魔法にかかった楽団員の信じられないような名演奏が伝わってきた。このような演奏はもうありえない時代になってしまった。だから記録の重要性はますます増している。この実演に居合わせた幸せな人たちの感動はいかばかりだったろうと考えるとため息しか出ない。今では音は古くても録音技術に感謝する次第だ。また、録音された後に生まれたことに心底感謝したものだ。

テレビはまだ音楽鑑賞に堪

えるレベルではなかったが、フランソワの来日公演は衝撃的だった。リヒテルの名演でなじんできたベートーベンの「熱情ソナタ」が全く違う音楽に聴こえて新鮮だった。シヨパンなどのCDを買って聴くようになったのはずっと後だったが、テクニクは別にして、彼は私の知る限りにおいて最高の天才ピアニストだと思ふ。早逝は実に残念だ。

当時地方ではコンサートを聴く機会は大変少なかったが、今はない福島市公会堂で聴いたシヨスタコーヴィツチの「森の詩」の苔むした森の湿っぽい情景描写が印象に残っている。これはスターリン政権の植林政策を讃えるための忘れられた駄作だということ最近知った。今は演奏されないもので貴重なものを聴いたことになる。

R・シュトラウスの「祝典序曲、紀元二六〇〇年」という大作をFM放送で聴いたのもこのころだったような気が

する。最初は日本政府が皇紀二六〇〇年奉祝曲としてブリテン「ネギリス」に委嘱し、シソフオニア・ダ・レクイエム」という曲もできたが、当時の国策に相応しくないのでの理由で演奏されず、あらためてR・シュトラウスに委嘱したらしい。ヒトラー政権下では作るしかなかったのだろう。ときどきドラの音が入っていたことぐらいしか覚えていない。これも忘れられた駄作だ。

ブリテンの曲は聴いたことはなかったが、何と今年五月のN響定期で下野竜也が取り上げていた。BSで聴いたが、荘重な鎮魂曲で聴き応えがあり、駄作ではなかった。両親の思い出に捧げる気持ちで作曲したらしい。

政治的な要素が入った委嘱作品で傑作が生まれることは稀だが、時代の気風や亡国の危機に熱い思いを寄せた、作曲者の心の奥底から湧き出てくる気高く深い作品に結実し

た例は、ベートーベンやシヨパンをはじめ、たくさん聴いてきた。

また、大学四年の年には県文化センターが落成し、その柿落とし公演でN響のコンサートと日本人演奏家による歌劇「蝶々夫人」の上演を聴いたのを覚えている。今とは比較にならないレベルではあったが、地方におけるライブコンサートは貴重な体験であった。

いつの間にかオペラをよく聴くようになっていた。この年、ベルリン・ドイツオペラの来日公演（二流歌劇場の引越し公演ラッシュのさきがけとなったもの）があり、日生劇場で上演された「魔弾の射手」を観に行った。字幕のない時代だったので対訳書で一生懸命予習していった。深々としたドイツ音楽の豊かな響きや幻想的な生の舞台は忘れられない。当時は日生劇場以外に適当なホールは無かったのだろう。

学生時代は小遣いが続く限り映画もよく見た。印象に残っているのは、数々のミュージカル映画だ。サウンド・オブ・ミュージック「南太平洋」マイ・フェア・レディ「ウエストサイド・ストーリー」

略奪された七人の花嫁」などだ。下手な時代遅れのオペラや喜歌劇などよりはるかに素晴らしい音楽で、LPのサウンドトラックを買って何度も聴いた。後にLDやBS放送などでも繰り返し視聴して楽しんだ。

そのころの感動体験も、後に自宅に高音質大画面再生ができる完全遮音の音楽室を造ることに繋がった。

オペラがプッチーニで終焉を迎え、多くの作曲家たちは新しいメディアの映画の分野で活躍し始めた。そういえばプッチーニは映画っぽいところがあるし、R・シュトラウスなど映画音楽そのものみだ。日本人では武満徹が世界的に有名で、コンサートで

聴くよりも映画の中で聴いていたほうがよほどじっくり聴ける。

こうして世はメディアの進化に沿ってAV志向となっていった。指揮者ではカラヤンが旗振り役で、いろいろ実験的な取り組みが目立った。ユニテルなどの映画会社などが貴重な映像記録をたくさん残してくれたおかげで、現在でも過去の名演奏に親しむことができる。その後、音楽界全体がそうなっていく、今日の隆盛を見ることになる。

こうして、学生時代は終わった。教職については聴く時間も少なくなっていくが、ジャズのレコードやオペラのレコードをよく買うようになった。しかし、針を一度通しただけになることが多くなっていった。

以上になるだろう。当時はとても買えなかった名レコードが今ではたくさんCDに復刻されたのも安く買えるようになったのはありがたい。

しかし、宝物のようなありがたみは感じなくなった。電源を入れ、プレーヤーの回転数を安定させ、レコード針を洗浄したり針圧を確認したりしたあと、白い手袋をはめ、ジャケットの中袋から盤面に触れないように注意しながらゆっくり取り出してターンテーブルにのせ、湿らせたクリーナーで盤面を拭き、慎重に針を降ろすなどという儀式は大幅に少なくなってしまう。期待感や音楽の重みもいっしょに薄まってしまったように思う。

しかし、一枚一枚大変な思いをして買ったレコードは今でも大切にしている。再生機器はAV志向で新しくなったが、レコード針、カートリッジも最新のものに更新した。今聴き直してもCDや放送メ

ディアとは比べ物にならない雰囲気と感動の思い出と熱い音が蘇ってくる。

初任地は雪国昭和村だった。昭和四十六年九月、NHK招聘の第六次イタリアオペラ公演の放送が視たくて、無理してローンでカラーテレビを買った。給料の約五ヶ月分の値段だった。今なら高級大画面ハイビジョンテレビが二台買える金額だ。中継アンテナが近くに無く、アンテナを高くしてブースターを付け、やっ」と何とか映った。アルマ「ラ・ファヴオリータ」サゴレット」など、本場の一流のイタリアオペラを堪能した。

車も持たず、山間奥地にこもっていたのでラジオも聴きかかった。五素子の八木アンテナを二段スタックにして新潟のFM局をようやく受信できた。しかし、豪雪で毎年グジャグジャに曲がり、毎春買って立て直した。四〇年ぶりの豪雪の年もあり、テレビのアンテナも必死で立て直した。

窮乏生活は急激なインフレでチャラになっていった。

安達に戻る頃には激しい右肩上がりの時代を迎えて収入も増えたが、レコードの値段はあまり変わらなかった。西ドイツ直輸入盤などで「トリスタンとイゾルデ」や「ロエングリン」
「カンホイザー」
「さまよえるオランダ人」などのワグナー物のレコードセットを買って聴いた。ワグナーでは演奏に一六時間もかかる長大な「三ibelングの指輪」が特に好きで、その後もレコードやCD、映像ソフトを追い求めている。

車の時代になり、忙しくもなってきた、いつの間にか音楽がゆっくり聴けるのは車内だけという情けない時代になっていった。カセットテープの時代になり、好きな曲をFM放送やレコードから録って聴くことが多くなった。自然とカーオーディオにも目が行き、三台目の車のときはエアコン代を削って当時最先端の

音のよいカーオーディオコンポ（パイオニア）を付けた。暑いのを我慢し、高音質のテープを選んでいろんな音楽を録音して聴いた。今でもカーステレオは純正品ではとても

我慢できず、現在の車もパイオニアの良質なスピーカーに換装し、満足できる音質で主にジャズやオペラ、ピアノ曲などのCDを聴いている。

このころ、四チャンネルステレオというのが流行していた。買うのは無理でも興味があつたので、秋葉原で部品やハンダ付けのセットと単体スピーカーも買って、マトリックス四チャンネルのデコーダーとスピーカーを組み立てて楽しんだ。このシステムは間もなく廃れ、レコード針やレコードも含めて市場から姿を消した。その後、ドルビーサラウンドステレオに発展し、LD時代に四チャンネルアンプを買って楽しんだ。これは現在のAV時代の高音質の七・一サラウンドステレオと

して更に発展し、大画面ハイビジョンで映像とともに楽しめるようになっていた。

その後マリア・カラスを知るところとなり、アルマやカルメン、ホスカのレコードを聴いて圧倒された。ホスカは後にLDで第二幕だけのモノクロ映像もパリとロンドンの二種類視たが、あの

迫真的な演技と歌唱はひとつの絶対的な完成の域に達している、これを超えるものは今後出ないと思わせるものだった。ミラノ・スカラ座の「椿姫」公演（一九五五年）もそういう記念碑的公演だったと言われているが、モノクロ写真と貧弱な録音、歌や演奏の素晴らしさは十分伝わってくる）があるだけだ。なんで舞台の映像記録を残さなかったのか、恨めしくとも残念だ。イタリアという国のお国柄もあるのだから。身近に常に最高のオペラがあるのでよりよく記録しようとは考えないのかも知れない。

そのイタリアのミラノ・スカラ座でさえ、その後「椿姫」の上演を一九九二年まで封印したのだから、よほどの名演奏だったのだろう。しかし、今ではただの伝説でしかない。やはり記録は大切だ。ジャズのブルーノートやイギリス・デッカのバイロイト録音のよ

うな、職人気質を感じさせる良心的な仕事をイタリア人に期待するのは無理なのかもしれないと思つたものだ。

しかし、ヴェルディ没後百年記念のビッグ・プロジェクト（二〇〇〇年六月）はずごかつた。パリで行った野外ロケ実況中継放送の「椿姫」は内容も素晴らしかつたが、二六億円という法外な経費と三万台のカメラにも驚かされた。久しぶりに「椿姫」に泣かされた。やはり、イタリアは普通ではないと思ひ知らされた。カラスのレコード買いが始まった。深夜独りでカラスを聴いて正座する日が続いた。LDもいろいろ集めたが、レ

コードが入手困難になったこともあり、収集をあきらめた。最近になってようやくCDボックスで全集を買ったが、あまり聴き直している時間はない。

また、ラジオやテレビの映画などでエディット・ピアフにも魅了された。「愛の賛歌」は下手なピアノのレパートリーにもなっている。ポップス系ではほかにナットキング・コールも好きで、よく聴いたが、CDを買ったのはずっと後だった。今はほとんど聴かない。旬の時代は終わっていった。やはり熱いときに聴くべきなのだが、時間的経済的にできなかつたのが現実だ。この辺が古典との違いだろう。そういう意味ではビートルズは古典だ。

ビートルズ第一世代（団塊の世代）としてはラジオで聴いたり、録音したりしてずいぶん聴いたものだ。ロックはエレキがかつたジャズやフュージョンも含めて全般に生理

的な嫌悪感を感じて拒否してきたが、ビートルズは別格だ。音楽史に貢献することが少なかつたアングロサクソン（ネギリス）の歴史においてビートルズの果たしたポジションはとて大きいと思う。エルガーに匹敵すると言ったら言い過ぎか。叙勲は外貨獲得がきっかけだったにせよ、今となっては実に意義深い処遇だったと思う。このことに抗議して叙勲を辞退した方々に叱られそうだが）

ホロヴィッツ・オン・TV「米CBSテレビ」のテレビ放送も衝撃的だった。特にショパンのバラードは圧倒的な演奏だった。こんな演奏は後にも先にもないだろう。スクリヤービンの魅力も初めて知った。さっそく実況録音盤を買ったが、音が格段にいいこともあって、あらためて聴き惚れた。

しかし、不思議なのはAV花盛りの時代になっても再放送やソフトの正規発売が無い

ことだ。NHKで一九七〇年前後に二回放送されたっきりだ。ゴミのようにビデオ音楽ソフトが溢れている時代に、これはとても解せない。その後レコードが入手できなくなるまでホロヴィッツのレコードを買い続けた。ショパンに対する認識も一変した。数年後の初来日公演（TV放送）は期待が大きかっただけに不調で残念だった。二度目の来日公演は前回で懲りたのかテレビ放送はなく、FM放送だけだったが、このときは調子がよく、素晴らしかった。こうしてショパンが好きになり、いろいろなピアノのCDを買って聴いたり、テレビ番組をチェックしたりするようになった。管弦楽よりもピアノ音楽や歌をよく聴くようになった。

ラジオでも印象に残っている演奏はたくさんある。ピエール・ブレーズの指揮するベートーベンの第五は頭を殴られたようなショッキングな

演奏だった。譜面のオタマシヤクシの隙間から向こう側が透けて見えるような演奏だった。

その後レコードがCDに取って代わってコレクションが頓挫し、忙しくなってきたことも重なって、いつの間にか音楽ソフトは買わなくなり、疎遠になっていった。

ちょうどこの頃（一九八五年）ビデオデッキ（V）を買って、テレビで音楽番組を録画して楽しむようになった。また、絵の出るレコード（LD）も導入し、マリア・カラスやオペラのディスクなどAVソフトに関心が移っていった。二〇インチの画面ながら、レーザーディスクで見たまばゆいばかりの絢爛たるゼッフィレルリ演出の「椿姫」の素晴らしさは圧倒的だった。

また、NHKによる衛星放送の試験放送が始まって間もない一九八八年三月、誰よりも早くパラボラアンテナを設置して受信し始めた。ブルー

イズが指揮するバイロイトの指輪の放送がどうしても視たかったからだ。アンテナの値段は今では十分の一に下がって普及しているが、先行投資にはそれだけの価値がある。カラヤンとキーシンのベルリンフィル生中継など、Bモーステレオの高音質番組のオン・パレードに圧倒された。FM放送のときと同じで、試験放送時代はいい音楽や映画がたくさん放送された。

このころから、全国に音のいいホールが続々で始めた。サントリーホールの素晴らしい響きは、テレビの貧しい音でさえもわかるほどだった。いつかは行ってみたいと思う。福島市音楽堂の響きも素晴らしい。多くの反対を押し切って作っただけのことはある。みんなの意見を聞くといい結果にならないこともあるのだ。近いのにあまり行くことはなかった。これからは公演情報をチェックして行くようにしたい。

宮城県の中田町のバッハホールも話題になったホールなので、数年前クリスマスコンサートを聴きに大雪の中行って来た。パイプオルガンは期待していたほどではなかった。ここは、二本松市コンサートホールを作るときに視察したホールだそう。

小澤征爾が指揮するサイトウキネンオーケストラによるブラームスなどもテレビで見た。すごい名演奏だった。今でも小澤征爾の公演番組などはボストン時代からエアチェックし続けている。

FM放送は車中では聴かなくなかった。CDプレーヤーは一九九三年「平成五」になってからようやく導入した。開発登場してから十年以上経ち、LPの時代は完全に終わっていた。しばらく遠ざかっていた音楽をまた聴き始めた。

グレン・グールドとの出会いはCDだった。これを機会に軍資金の関係で封印していたバッハにようやく手をつけ

たような感じだった。独特のノリで酔わせるバッハだった。もっと若い時に聴きたかったなとも思った。昔ラジオで聴いたベートーベンの異常なテンポの「皇帝」バーンスタインと共演したスリリングな演奏が印象に残っていたピアノストだ。

かつて「マタイ受難曲」で大きな感銘を受けたカール・リヒターのバッハ全集も買いた。あらためてバッハを聴き直している。

二本松市のコンサートホールができ、平成元年の最初期から音楽協会に入会し、質の高い生演奏を楽しませていただいている。一流の演奏家による小編成の数多くの多様な楽器やアンサンブルの生演奏は、いつも魅力的でとても貴重だ。

このころからフュージョンなどに埋もれていたジャズが復活し始めていた。大西順子のピアノに打ちのめされ、虜になった。一九九三年のこと

だ。リリースされるCDは全部買って聴いている。十年くらい空白があったが、最近またCDを出して活動を再開したのでとても楽しんだ。ライブ福島市内のライブハウスも聴きに行った。最近移籍して新譜をリリースしたので是非聴いてみたいものだ。

こうして、ライブやCD、映像付き音楽に夢中になっていたころ、早池峰登山をした日の夜、初めて岩手県一関市にある有名なジャズ喫茶に行

った。一九九九年の夏だった。噂に聞いていた憧れの店だった。その晩はちょうどマリーンのライブがあった。キュートでガッツのあるジャズヴォーカルのスタンダードナンバーを至近距離で楽しみ、至福の時を過ごした。

それ以来何度も「ベイシー詣で」をすることになった。

JBLの二チャンネルステレオシステムのLPレコード演奏を聴いて度肝を抜かれた。音の厚み、奥行き、立体感、

温かさ、CDでは聴けない、ライブとは違った、ライブを越えたリアルで熱い音の洪水に圧倒された。本物以上という世界があったのだ。音だけでこれだけのことができるのかと驚いた。著名人が一様に言う「日本一の音」という評判は本当だった。店内の壁は訪れた有名人のサイン（落書き）でいっぱい。レコード演奏家「店主」の音（音楽）を聴こうとファンが全国（海外からも）から集まってくる。

ここは私語厳禁と指示されているわけではないが、とにかく音量が大きいから会話は成立しない。みんな黙って何時間も聴いている。オーダーはタイミングをつかむほかない。今では国内のあちこちのジャズ喫茶めぐりも楽しみの一つになった。

そのうち本格化した衛星デジタルハイビジョン放送を視るようになった。小澤征爾の二〇〇二年一月のニューイヤーコンサートは、シンフォニ

ツクなウインナワルツが素晴らしい。かっこよかった。感動したFM放送やBモードステレオの音は色褪せた感じがするほど画質や音質が飛躍的に向上している。贅沢には際限がないものだ。

今では百インチスクリーンで衛星デジタルハイビジョン放送を五・一サラウンドステレオで楽しんでいる。十数年かけてコツコツと作ってきた七つの自作スピーカーによる七チャンネル・シアターサウンドシステムはまあまああついで鳴っている。

映画はもちろん、オペラやバレエ、コンサートはこれに限る。ネットレプロの椿姫やボエーム、もうたまりません。小学生のころ見た映画を我が家でもう一度観たいと思っている。あれから五十年が経過したが、まだ巡りあっていない。

私はライブが絶対だとは思わない。よく聴こえない、見えないということもあり、野

球や相撲もTV中継のほうがいいというのと似ている。よくできた録音録画物のほうがいいものはたくさんある。過去の名演奏など音質が悪くても貴重な演奏が聴ける。でも、これはそこに居合わせることでできなかった負け惜しみかもしれない。

わざわざ遠方や海外に行かなくても、我が家は今や多様なメディアで世界とつながっている。今では高速インターネットでコンサート中継を視聴することができる時代になっている。

国内ではその気になればいくつかの一流映画館でメトロポリタンオペラの中継を鑑賞することができる。同じ内容の録音番組を数カ月遅れでNHKがハイビジョン放送するのが必要性は感じないし、BDブルーレイディスクに録画して楽しめる。

今年についてはバイロイト音楽祭の封印が解かれ、国際共同制作でNHKが史上初の実

況中継をした。演目は楽劇「ワルキューレ」、大変な時代になったものだ。それでもバイロイト詣での価値は無くならないが、チケットが高額な上に入手困難だそう、私などには永遠に不可能なことだ。

録画したオペラなどのBDもたまり始めた。しかし、演奏会で生の音楽を聴くことはとても大切だと思う。実際の楽器の音やホールトーン、空気感、響きなどに親しみ、本質的なものや本物体験をすることによってはじめて、メディア（媒体）を通じた演奏のよりよい鑑賞が可能になることを実感している。個人差はかなりあるが、脳の内部では不足する情報を補ってくれる働きがあるのだと思う。私は貧しい音質のレコードでも数分後には演奏の中に入っている、音楽を十分に楽しめる。ライブ体験の質と量も功を奏しているのだと思う。

最近の首都圏はもちろん、近隣の都市でのオペラ公演や

コンサートにはできるだけ行くように努めている。また、いろいろなホールや地域の音楽会にもなるべく出かけるようにしている。コンサートホールの二本松音楽協会をはじめ、ムッキョジのパオや彦ハウス、音楽ホールエムズサウンド、あちこちのジャズ喫茶やライブハウスなどもとても楽しい。

退職してからは、上京していろいろな公演も聴きに行けるようになった。今年七月のトリノ王立歌劇場引越越し公演の「ボエーム」、小澤征爾や下野竜也が指揮した九月のサイトウキネンフェスティヴァルはすばらしかった。年内は十一月にいわきで「アイダ」、十二月に東京文化会館で「魔笛」を観に行く予定だ。チケット貧乏にならない程度に出かけたい。

私の音楽遍歴は、テクノロジに感謝しながらもメディアに頼り、メディアに翻弄されてきた歴史でもある。生録

機器や携帯音楽再生機器もいろいろ追いかけてきた。オープリンリールのテープレコーダーからカセットテープレコーダー、そして、ビデオが登場した頃PCMデジタル録音システムを導入し、FMや生録をやってきた。その後ポータブルDATになり、今ではSDメディアを使ったPCMレコーダーを使い、パソコンと連携してDTMに進みつつある。MDやiPODなどの携帯音楽機器には関心がなく、導入しなかった。やはりレコードやCD、DVDなどのパッケージメディアと放送番組のエアチェック物がいい。

たまりにたまった録音録画物 ベータ、八ミリ、SVHSやDVHS、DVDやBD)や買ったままのレコードやCDを視たり聴いたりするためにも、残された時間はあまりない。デザート・アイランド・レコードを選べと言われた日にゃあ、お手上げだ。健康増進のために畑や野外に出るこ

とも多く、情報収集やデータ管理ばかりで音楽に親しむ時間がなかなか確保できなくなってきた。旅行もしたいし、精選と工夫が必要なようだ。ドンキホーテにならないようにしなければ。

第二稿(二〇一〇年十月)